

組織培養植物の栽培地検査制度の整備



最近におけるバイオテクノロジーの進展に伴い、種苗の生産分野においても、組織培養技術を利用して優良な種苗が大量に生産されるようになってきており、これら種苗の輸出の増加が見込まれる状況になっている。

このような情勢に対処するため、組織培養植物

の栽培地検査制度の整備が図られた。

その内容は次のとおりである。

①植物防疫法施行規則および輸出植物検疫規程の一部改正が行われ、随時、検査申請書の受付けおよび検査が実施できる。②対象となる植物は、組織培養により作出される植物で、てっぼうゆり・やまゆり・かのこゆりおよびチューリップ並びに輸入国が栽培地検査を要求する植物等である。③検査の方法は、1次検査および2次検査からなり、1次検査では栽培施設が無菌状態か否か等につき検査し、2次検査は、対象植物のウイルスの有無を検定する。

これにより組織培養植物の輸出がより円滑に行われるものと期待される。

海外のニュース

アメリカで発見されたラッカセイの新しいウイルス病

世界のラッカセイの主生産国の1つであるアメリカ合衆国では、Peanut mottle virus, Peanut stunt virus, Tomato spotted wilt virusによる3つのラッカセイのウイルス病が知られていた。1982年夏、ジョージア州にあるUSDAの種子導入のための実験ほ場 (Southern Regional Plant Introduction Station) で中国産ラッカセイを栽培中に既存の病徴と異なる新しいウイルス病が発見された*。

感染苗は葉の支脈に沿って不連続の葉脈緑帯やし模様 (stripes) の病徴を生じ、翌年の調査では本病発生地の近くで栽培されていた他国から輸入されたラッカセイにも感染していることが確認された。また、ノースカロライナ、フロリダ、ルイジアナ、テキサス州でも同様のウイルス病の発生が認められた。さらにダイズ、フジマメ等の作物にも被害を与えることが実験的に証明された。病原ウイルスはラッカセイでは37%もの高率で種子伝染するほか、我が国にも生息するマメアブラムシによって非永続的に伝搬される。粒子の形態お

よび血清学的類縁関係等が調べられた結果、本ウイルスは potyvirus group に属することがわかり、その病徴から Peanut strips virus (PStV) と名づけられた。このように、中国原産と思われるウイルスがアメリカ合衆国で発見されたことは、植物検疫上興味深いことである。このPStVがアメリカ合衆国のラッカセイ栽培地帯にまん延した場合、850万ドル以上という多大な損害が予想されている。その上、伝搬様式や寄生性からみて、短期間でラッカセイのみならず他のマメ科作物へも被害の拡大が懸念されることから、アメリカ合衆国は1984年8月に中国からのラッカセイ種子の輸入を禁止した。我が国でも、このPStVの侵入を警戒する必要があるものと思われる。

* Plant Disease Vol.69 No.9 (1985). (病菌課 水野明文)

発行所	横浜植物防疫所 〒231 横浜市中区北仲通5-57(横浜農林水産合同庁舎) ☎045(211)2299
発行人	小畑 琢 志
編集責任者	北 島 克 己
印刷所	内村印刷株式会社 〒231 横浜市中区末吉町1-12 ☎045(261)7961